

## 私撰・私家集歌と謡曲

松 田 存

### はじめに

先に『万葉集』歌と勅撰集（二十一代集）歌を扱った『和歌と謡曲考』を上梓（昭和六十二年六月、桜楓社）、ついで『伊勢物語』和歌と謡曲（昭和六十二年十月、二松学舎百十周年記念論文集）・『源氏物語』和歌と謡曲（平成二年三月、二松学舎大学論集）について、それぞれ発表したのが、今回は私撰・私家集歌と謡曲とのかかわりを明らかにすべく論考を試みることにしたい。

帝王の下命による歌集の編纂を勅撰とすることに対する私撰ということになれば、勅撰にあらざる『万葉集』はいわば私撰ということになるが、この場合は概ね大伴家持（七一八～七八五）撰の一大国民歌集というのがほぼ定説となっている。

いずれにしても私撰集は、公的な勅撰集に対する私的な歌集として、『私撰集伝本書目』（昭和五十年、明治書院）によれば、書名だけでも八百種を数えることができる。なかでも謡曲に引歌の多い『古今和歌六帖』は、平安時代中期の成立で、『万葉集』から『後撰集』の頃までの約四千五百首を六帖二十五項五百十七題に細分した類題和歌集である。

以下、『古今和歌六帖』歌を引く謡曲を掲げての考察に移ることにする。まず第一帖の、

○いもがかどゆきすぎかねつひぢかさの 雨もふらんあまかくれせん

(上二〇四頁)

が、切能物の「合浦」(かつぽ)に引かれている。観世流オンリーの現行曲で、祝言性を備えていることから略協能物としても扱われる。

唐土は合浦の里(広東省)を舞台に、ある里人(ワキ)が、珍魚を釣り上げた漁師(間狂言)からこれを買いにとって家に帰る態から展開する。そこへ一人の童子(シテ)が現われ、里人との問答で魚鱗の精が、「命を継がれまゐらせし、報謝の為に来りたり、我が泣く涙の露の玉、絶えぬ宝となるべきなり」と、報謝のために来た由を明かし語って立ち去る。

△中入▽

そして後段、宝珠を捧げ持った鮫人(後シテ)が現われ、寿命長遠息災延命の宝珠を里人へ渡し、報恩の舞(働キ)となる。

件の歌は、前場シテの一セイに続く、

ワキ「たゞく水鶏の外面に立つや久方の、埴生の小屋に小雨降る

シテ「床さえぬれば

ワキ「我妹子が

地謡「(上歌) 肱笠の、雨は降り来ぬ雨宿り、くくの、頼む木蔭かや

とあり、曲趣と歌意との関係なく単なる修辭上の引歌ということができよう。

なお、超人間的な鮫人が現われ、報恩のための奇特を見せるという素材は、『蒙求』『述異記』や『十訓抄』等にみえる、

いわば魚鳥報恩譚である。

『古今和歌六帖』歌と謡曲ということであれば、

○あふことをあこぎが嶋にひくあみの　たびかさならば人も知りなん

(上二九七頁)

があげられ、曲(作品)の主題ともなる「阿漕」をはじめ、「玄象」「松風」にも引く(後述)。

「阿漕」は、「鵜飼」「善知鳥」とともに三卑賤と総称されている執心物の能で、能では四ツ手網をもって地獄に苦しむ密漁の仕型話が、立廻りによって再現される。

伊勢大神宮の参詣におもむく九州日向国(宮崎県)の男(ワキ)が、瀬戸内の長い船旅ののち、阿漕が浦につく。すると一人の漁翁(前シテ)が現われ阿漕が浦の由来を物語る。

その昔、伊勢大神宮御膳に供するための網だけ入れることのできる殺生禁断の漁場で網を引き、その罪で海に沈められた一人の漁夫の名を阿漕といったので、その海を阿漕が浦というようになった。実は漁翁こそ阿漕の霊の化身で網を引く様を見せながら消えていく。△中入▽

そこで、阿漕の霊(後シテ)がふたたび旅の男の幻覚に現われ、網を置いて魚を追いつんで捕らえるしぐさを立廻りという舞事によって示す。そして、因果応報の地獄の苛責の様を示し、その「罪科を助け給へや旅人」と、罪を許されることを願い、阿漕が浦の波底に入っていく。

旅の男の「この浦を阿漕が浦と申すいわれ御物語候へ」によってシテ漁翁が「総じてこの浦を阿漕が浦と申すは、……」と語る語(かたり)とクセは謡としての聞きどころで、後段、殺生の場と地獄の苛責とを示す立廻りという一種の舞事が、この曲の大きな見どころといえよう。それは四ツ手網という小道具を持つのしぐさで、前シテは釣竿を持って出る。その他、無地熨斗目という着付は前後とも変わらないが、面をはじめ、前後の扮装が若干変わる。

殺生禁断の罪科を主題とする「鵜飼」「善知鳥」とともに、三曲の比較鑑賞も興味深い。

この『古今和歌六帖』歌をひく『源平盛衰記』卷八の所収歌、

○伊勢の海阿漕が浦に引く網も 度重なれば人もこそ知れ

という詠歌をも主軸に脚色されているが、これらの歌はもともと恋の歌で「しのぶ恋も、度重なれば露顕」という意味である。

もちろんそれは「阿漕が浦」の伝説から採り、ストーリーを伝説のものに戻しながら、恋の歌を引用して「みやび」を出している。このみやびが前半にあるため、後半の地獄の苦しみとよく対比され、効果をあげている。

なお本曲は、四番目物として分類されてはいるが、略式切能物としても扱われる。

両歌の引歌個所は、

ワキ「さては承り及びたる阿漕が浦にて候ひけるぞや古き歌に、伊勢の海阿漕が浦に引く網も、度重なれば顕れにけり、かやうに詠まれし浦なるぞや、あら面白や候

シテ「あら優しの旅人や、所の和歌なればなどは知らで候べき、かの六帖の歌に、逢ふ事も阿漕が浦に引く網も、度重ならば顕れやせん、かやうに詠まれし海士人なれば、さも心なき伊勢をの海士の、見る目も軽き身なればとて、賤しみ給ひ候なよ

と、前場のシテとワキの掛合の個所に引かれている。

なおこれら二首の詠歌は、いずれも須磨の浦を舞台とする「玄象」（作者不詳切能物）と、「松風」（世阿弥改作三番目鑿物）にそれらしくないまぜて引く。

前者では、

地謡「（下歌）げにや面白き、海士の磯屋とや淡路潟、あは沖舟の漕ぎ来るは、雨ごさめれ今一返りも、汐汲めや人々（上歌）そよや陸奥の、く、千賀の塩釜は、名のみにて遠ければ、いかが運ばん伊勢島や、阿漕が浦の汐をば度

かさねても汲み難し田子の浦の汐をばいざ下り立たんわくらはに、問ふ人あらば、佗ぶと答へてこの須磨の浦の  
汐汲まんく

と、海辺塩屋の縁にて引き、続けて「松風」の主題歌ともいえる在原行平の詠歌――『古今集』第一八・九六二をも引いてい  
る。そして「松風」の方では、

地謡「(ロンギ) 運ぶは遠き陸奥のその名や千賀の塩釜

シテ「賤が塩木を運びしは阿漕が浦に引く汐

地謡「その伊勢の海の二見の浦二度にも出でばや

と引かれている。

『古今和歌六帖』から今一首、

○百千鳥花に馴れ行くあだし身は はかなき程に羨まれぬる

(『謡曲拾葉抄』所引)

が、「右近」(作者不詳初番目物)「桜川」(世阿弥作狂女物)「胡蝶」(小次郎信光作三番目物)の三曲に引かれている。なかでもほぼ原歌  
通りに引く「右近」は、春たけなわの都は北野の右近の馬場の桜狩で、上洛した鹿島の神職(ワキ)が、業平の、

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくは あやなく今日や詠め暮さん

(『伊勢物語』九九段)

という歌を口ずさむと、花見車を立てていた女(シテ)が感応し、北野の縁起を物語ってから消え失せる。△中入▽

後段、夜更けた桜のおぼろ月夜の中にその本体(桜葉ノ神)を現わして春興の舞(中之舞・破ノ舞)を舞ってみせるというも  
ので、件の歌は、

シテ「見ずもあらず

地謡「(上歌) 見もせぬ人や花の友、く、知るも知らぬも花の蔭に、相宿りして諸人の、何時しか馴れて花車の、楊  
立てゝ木の下に、下り居ていざや眺めん、げにや花の下に、帰らん事を忘るゝは、美景に因りて花心、馴れく

初めて眺めんいざ／＼馴れて眺めん

〔下歌〕百千鳥、花に馴れ行く徒し身は、はかなき程に羨まれて上の空の心なれや／＼

〔ロンギ〕げに名にし負ふ神垣や、北野の春も時めける、神の名所数々に

と、花の縁で、ほぼ原歌通りに引かれている。また「桜川」も同趣で、

地謡「クセ」げにや年を経て、花の鏡となる水は、散りかゝるをや、曇ると云ふらん、（中略）馴れしも今は先立たぬ

悔の八千度百千鳥花に馴れ行く徒し身は、はかなき程に羨まれて、霞をあはれみ露をかなしめる心なり

と原歌通りに引き、これが「胡蝶」では、「梅花に縁なき」胡蝶が、

地謡「クリ」げにや色に染み、花に馴れ行く徒し身は、はかなきものを花に飛ぶ、胡蝶の夢の戯れなり

シテ「サシ」されば春夏秋冬を経て

と、二、三、四句が引かれている。

## 二

次に『夫木和歌集』であるが、この類題集は、冷泉為相の門弟藤原長清の撰により三十六卷五九六題に部類され、勅撰集の未収歌一七三五〇余首を収め、延慶二（一三〇九）・三年頃の成立と推定される。後に『玉葉集』の資料にもなったらしく、また作歌上の参考や連歌の付合、証歌の検索などにも利用されただけに、謡曲にも十首余り引かれている。次に当該曲の作者・分類・引歌箇所、曲趣との関わりを記そう。

○吹きおろす春の嵐の山風に 戸無瀬の滝の花の白波

（巻第四春部四・一五〇一・民部卿雅有卿）

「嵐山」（金春禅鳳作説脇能物）

シテ「（上歌）」さも妙なれや九重の、／＼、内外に通ふ花車、轅も西に廻る日の影行く雲の嵐山、戸無瀬に落つる白波

も、散るかと思ゆる花の滝、盛り久しき景色かなく

ワキ「不思議やなこれなる老人をみれば、花に向ひ渴仰の気色見えたり、おことは如何なる人やらんと文字通り嵐山の叙景歌として引かれている。

○めぐりくる三月も久し三千年に なるてふ桃の花の盃

(巻第五春部五・一七五二・民部卿為家卿)

「西王母」(作者不詳協能物)

シテ「(二セイ) 君に捧ぐる桃実の

地謡「花の盃取りあへず(中之舞)

地謡「フル花も酔へるや盃の、く、手まづ遮る曲水の宴かや御溝の水に、戯れ戯るゝ、(下略)

「三千歳に花咲き実生る桃花」を捧げる西王母伝説を脚色の曲に引かれること当然といえは当然であろう。

○葛城や木蔭に光る稲妻を 山伏の打つ火かところ見れ

(巻第二秋部三・五〇七八・源兼昌)

「葛城」(作者不詳三番目物)

地謡「(クセ) 葛城や、木の間に光る稲妻は、山伏の打つ、火かところ見れ、げにや世の中は、(下略)

と、文字通り詰めどころに原歌のまま据え、上歌の個所では、「楚樹ゆふ、葛城山に降る雪は、く、間なく時なく、思ほゆるかな」という歌(『古今集』巻二十・一〇七〇・大歌所御歌)を引いている。

○初雪のしるしの棹は立てしかど、そことも見えず越の白山

(巻第一七冬部二・七二六一・大炊御門右大臣家佐)

「室君」(作者不詳四番目物)

ツレ「然れば春過ぎ夏闌けて

地謡「秋既に暮れ行くや、時雨の雲の重なりて峯白妙に降り積る、越路の雪の深さをも、知るや標の棹立てゝ、豊年月の行く末を、計るも棹の歌謡ひていざや遊ばん

と、原歌の二、三句をふまえた修辭であらう。

○いかにせん冬木も未だこらなくに 深くも雪のなりまさるかな

(卷第一八冬部三・七二四〇・前中納言雅頼卿)

「鉢木」(世阿弥作説四番目物)

地謡「捨人の為の鉢の木切るとてもよしや惜しからじと、雪うち払ひて見れば面白や如何にせん、まづ冬木より咲き初むる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば梅を切りや初むべき、(下略)」

○木賊刈る園原山の木の間より 磨き出でぬる秋の夜の月

(卷第二〇雑部二・八四四三・源仲正)

「木賊」(世阿弥作説四番目物)

地謡「(ロンギ)刈るや木賊の言の葉は何れの詠めなるらん

シテ「木賊刈る、園原山の木の間より、磨かれ出づる、秋の夜の月影をもいざや刈らうよ

と、ほぼ原歌通りに引いているが、歌の名所として知られる本曲の舞台とされている園原山には、「園原や伏屋に生ふる帚木の、ありとは見えて逢はぬ君かな」という、主題とも云える歌『新古今集』卷第十一・九九七がみえること勿論のことである。原歌通りということであれば、

○愛宕山楮の原に雪積り 花摘む人の跡だにぞなき

(卷第三二雑部四・九九五一・好忠)

が、次のように「車僧」(作者不詳切能物)に引かれている。

後シテ「(サシ)愛宕山楮が原に雪積り、花摘む人の跡だにもなし、げに雪中に山路なし、さて車輪は如何に車僧、我

ほど尊き者あらじと、慢心の心路跡なからんや、(下略)

○里近く山路の末はなりにけり 野飼の牛の子を思ふ声

(卷第二七雑部九・一二九五・寂蓮法師)

「唐船」(外山吉広作説四番目物)



地謡「(上歌) あれを見よ、野飼の牛の声々に、く、子ゆゑに物や思ふらん、況んや人倫に於いてをや我が身ながらも愚かなりく

と、異国(日本)の地で牛馬を扱うことになった祖慶官人(シテ)の、唐子・日本子を思う心情が吐露される個所に引かれて居り、一曲の効を成している。

○君がため蓬が島もよりぬべし 生薬とる住吉の浦

(卷第三・雑部一四・一五〇六五・従二位家隆卿)

「養老」(世阿弥作脇能物)

地謡「(クリ) げにや尋ねても蓬が島の遠き世に、今の例も生薬、水また水はよも尽きじ

シテ「(サシ) それ行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にはあらず

地謡「流れに浮かむ泡沫は、かつ消えかつ結んで、久しく澄める色とかや

と、「蓬が島(日本)の遠き世」の霊泉湧出の説話(『古今著聞集』にもみえる)をふまえて引き、長明の『方丈記』の冒頭を続けている。

○入相の遠山寺の鐘の声 あな心ぼそわが身いくぞよ

(卷第三・四雑部一六・一六四一六・基俊)

「通盛」(井阿弥作世阿弥改作修羅物)

ツレ「(サシ) すは遠山寺の鐘の声、この磯近く聞え候

シテ「入相ごさめれ急ぎ給へ

ツレ「程なく暮るゝ日の数かな

と、遠山寺の鐘の声―入相の意で引かれている。

○姿こそ山のかせきに似たりとも 心は花になさばならめや

『謡曲拾葉抄』所引、紀友則の詠歌であるが、『古今集』(卷第十七・雑歌・八七五)には、「かたちこそみ山がくれの朽木なれ

心は花になさばなりなん」とみえる。

「小塩」(金春禪竹作説四番目物)

ワキ「不思議やな貴賤群集のその中に、殊に年たけたる老人花の枝をかざし、(下略)

シテ「思ひ寄らずや貴賤の中に、別きて言葉をかけ給ふは、(中略)姿こそ山の鹿に似たりとも、心は花にならばこそ、なさばならめや心からに

と、ほぼ原歌通りに引いている。

なお「小塩」は、略三番目物として「雲林院」と同工異曲でもある。

洛西・大原山を舞台に、折から訪れた下京辺に住居する花見の男(ワキ・ワキツレ)が、桜花をかざして浮かれている一人の尉(シテ)から、大事な昔語りを聞くとところから展開する。

それは昔、「この大原野の行幸に、在原業平供奉し給ひし時、忝くも後の御事を思ひ出でて」詠んだ、「大原や小塩の山も今日こそは 神代の事も思ひ出づらめ」(『古今集』巻第十七・八七二)という歌に関する秘事で、その尉こそ業平の霊の化身で、やがて夕がすみの中に失せて行くのである。△中入▽

かく、後場において、花見男の夢に業平の霊(後シテ)が匂やかな姿で現われ、「春宵一刻値千金」の舞(序之舞)を舞ってみせるのである。

前場は、花に浮かれる遊狂の情趣で、後場の優美で抒情的な場面とが、えもいわれぬ情趣をかもすことになる。

素材は『伊勢物語』七十六段であるが、前掲の主軸となる歌をめぐる説話は、『大和物語』一六一段にもみえて居り、なおこの歌は『古今和歌六帖』にもあげられている。

では次に、私家集歌と謡曲の関わりについて考察することにしよう。まず私家集は、古くは家の集また単に集とか家集とも呼称、撰集・打聞の如き多人数の総合的家集と区別される歌集の分類名で、つまるところ個人の歌の集を指し、近世以前の歌人についてだけ称している。いま『私家集大成』（明治書院）によると、三六二名五三三種の家集が、ほぼ各歌人の没年順に収められている。

ともあれ今、佐成謙太郎の『謡曲大観』によると、謡曲との関わりを有する私家集としてあげられているのは、『菅家御集・貫之集・頼政集・拾玉集・山家集・月清集・拾遺愚草・壬二集・七玉集・藤谷集・草庵集』のほか、歌学類として『古今秘抄・俊頼口伝・袖中抄・雲玉集』等である。

まず菅原道真（八四五～九〇三）の私家集である『菅家御集』からの引歌は次の通りである。

○山人の笠も薪も埋もれて 雪こそくだれ谷の下道

〔葛城〕（作者不詳三番目物）

地謡「（上歌）肩上の笠には、くく、無影の月を傾け、擔頭の柴には不香の花を手折りつゝ、帰る姿や山人の、笠も薪も埋もれて、雪こそくだれ谷の道をたどり帰り来て柴の庵に着きにけりくく

と、結句が若干異同するほぼ原歌通りの雪山を象徴するに所応しい引歌である。

○山里の折りかけ垣の梅の花 いかなる人の見じといふらん

〔鉢木〕（世阿弥作説四番目物）

地謡「捨人の為の鉢の木切るとてもよしや惜しからじと、（中略）人こそ憂けれ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情けなしと惜しみに、今更薪になすべしとかねて思ひきや

と、「まづ先だてば梅を切りや初むべき、見じといふ、」旅僧（最明寺入道北条時頼）をもてなす件りにほぼ原歌通りに上ノ句を引いている。

○花見にと群れつつ人のくるのみぞ あたら桜のとがにはありける

（西行『山家集』上・春・八七）

「西行桜」（世阿弥作四番目物）

ワキ「いかに面々、これまで遙々来り給ふ志、返す／＼も優しうこそ候へさりながら、（中略）花見んと群れつゝ人の来るのみぞ、あたら桜の、とがにはありける

と、西行庵を舞台に、曲の主題歌ともいえるこの歌は、続くシテ（サシ）にも原歌通りに引き、なおシテ「いや上人の御歌に、何か不審のあるべきなれども、群れつゝ人の来るのみぞ、あたら桜の、とがにはありける、さて桜のとがは何やらん」とみえる。また、『山家集』からは、

○風吹けばあだになり行く芭蕉葉の あればと身をも頼むべき世か（雑歌）

が、金春禅竹作三番目物「芭蕉」に引かれている。

次に藤原定家（一二六二～一二四二）の『拾遺愚草』をあげよう。同集歌の、

○偽りのなき世なりけり神無月 誰が誠よりしぐれそめけん

（『拾遺愚草』下・冬・二四〇八）

が、「定家」（金春禅竹作三番目物）の、

ワキ「さては藤原の定家の卿の建て置き給へる所かや、（下略）

シテ「いや何れとも定めなき、時雨の頃の年々なれば、（中略）偽りのなき世なりけり神無月、誰が誠よりしぐれ初めけん、この詞書に私の家にてと書かれたれば、もしこの歌をや申すべき

と原歌通りに引かれている。もっともこの引歌は、本曲にとっては主題に類する歌として、『続後拾遺集』からの引歌かもしれない。なお「定家」には、このあとクリ・サシ・クセの、次の件りに同じ『拾遺愚草』から二首の引歌がみえる。

地謡「後の心ぞ、果てしもなき(クセ)あはれ知れ、霜より霜に朽ち果てゝ、世々に古りにし山藍の、袖の涙の身の昔、憂き恋せじと御祓せし、(下略)

シテ「げにや歎くとも、恋ふとも逢はん道やなき(b)

地謡「君葛城の峯の雲と、詠じけん心まで、思へばかゝる執心の、定家葛と身はなりて、(下略)

前者(a)は『謡曲拾葉抄』にもみえるが、両歌ともにほぼ原歌通りの引歌である。『拾遺愚草』といえ、他に、

○都辺はなべて錦となりにけり 桜を折らぬ人しなければ

〔『拾遺愚草』上・春・一四〕

が、「小塩」(金春禅竹作四番目物―前出)に、

ワキ「里は軒端の家桜

シテ「匂ふや窓の梅も咲き

ワキ「あかねさす日も紅の

シテ「霞か

ワキ「雲か

シテ「八重

ワキ「九重の

地謡「(上歌) 都辺は、なべて錦となりにけり、く、桜を折らぬ人しなき、花衣著にけりな、時も日も月も弥生、あ

ひにあふ眺めかな、げにや大原や、小塩の山も今日こそは神代も思ひ知られけれ、神代も思ひ知られけれ

と、ほぼ原歌通りに引き、業平の歌〔古今集〕卷第十七・八七二に続けるという技法を用いている。

四

以下、家隆（一二五八～一二三七）の『壬二集』、家長（一二七三？～一二三四）の『七玉集』（弘長百首、冷泉為相（一二六三～一二三八）の『藤谷集』に、頼阿（一二八九～一二七二）の『草庵集』からの引歌を検証してみよう。

「龍田川」は、古今歌の枕詞として著名であるが、「龍田」（金春禪竹作四番目物）には、次のように『壬二集』と『七玉集』からそれぞれ引く。

「龍田」は、かの、

○龍田川紅葉乱れて流るめり 渡らば錦中や絶えなん  
を主題歌として、

（『古今集』巻第五・二八三・よみ人しらず）

シテ「紅葉の歌は帝の御製、又その後家隆の歌に、龍田川紅葉を閉づる薄氷、渡らばそれも中や絶えなんと、重ねてかやうに詠みたれば、必ず紅葉に限るべからず

と地謡の上歌、シテ・ワキの掛合に至る件りに、はば原歌通りに引き、家長の歌は、後場の地謡（クセ）に、

「（前略）然れば代々の歌人も、心を染めて桤葉の、龍田の山の朝霞、春は紅葉にあらねども、ただ紅色に愛で給へば、今朝よりは、龍田の桜色ぞ濃き、夕日や花の、時雨なるらんと、詠みしもくれなるに心を染めし詠歌なりと、はば原歌通りに引き、くれなるに心を染めし詠歌」だとしている。

『藤谷集』を遺す為相といえ、為家の子で、二条家為氏の異母弟として冷泉家の祖となる。『十六夜日記』で知られる母阿仏尼（一二三二？～一二八三？）の後を追って鎌倉へ下ったことはあまりにもよく知られるエピソードである。そして鎌倉より相州金沢の称名寺を訪ね、

○いかにしてこの一本にしぐれけん 山にさきだつ庭のもみぢ葉

（『藤谷集』秋歌・一五三）

と詠み、実はこの歌を主軸に謡曲「六浦」が成立する。

『能本作者註文』に金春禅竹作、『二百十番謡目録』に日吉安清作とある三番目物（太鼓序之舞物）。

京都方の僧（ワキ）が、東国行脚の旅途、相模国六浦の称名寺へ立ち寄ると、今を盛りと色付く紅葉の中、一葉も紅葉しない楓があった。不審に思っていると、一人の里女（シテ）が現われて、往昔、在鎌倉の中納言為相（二六三〜一三八）卿が来寺された折、この楓一本が紅葉しているのを見て、「いかにしてこの一もとにしぐれけん山に先だつ庭のもみじ葉」（冷泉為相の私家集『藤谷集』）と詠じ、悦んだ楓は「功成り名遂げて身退くは、これ天の道」と、以来常磐木のようにになった、と語り、自分がこの楓の精であると告げて消え失せる。△中入▽

その夜、僧の前に楓の精が現われ出で、草木国土悉皆成仏の功德を礼讃して舞（序之舞）を舞う。そして、やがて明け方になると、月影のように消えてしまうのである。いわゆる草木の精を主人公とする「杜若・芭蕉・西行桜・遊行柳・墨染桜」などの類曲であるが、前掲歌を主軸にうまく纏められている小品といえよう。

なお現在、金沢文庫に隣接する称名寺の境内には、為相がこの一首を詠じたという楓の何代目かの木が伝えられている。

シテの登場、ワキの、

「山々の紅葉今を盛りと見えて候に、これなる楓の一葉も紅葉せず候程に不審をなし候  
というのに対し、

シテ「げによく御覧じとがめて候、古鎌倉の中納言為相の卿と申しし人、紅葉を見んとてこの所に来り給ひし時、山々の紅葉未だなりしに、この木一本に限り紅葉色深く類ひなかりしかば、為相の卿とりあへず、如何にしてこの一本にしぐれけん、山に先だつ庭の桼葉と詠じ給ひしより、今に紅葉をとどめて候  
と、ほぼ原歌通りに引くが、これに対し、

ワキ「面白の御詠歌やな、われ数ならぬ身なれども、手向のために斯くばかり、古り果つるこの一本の跡を見て、袖

の時雨ぞ、山に先だつ

との返歌に及んでいる。

最後に頼阿の『草庵集』から一首をあげておこう。

○いつよりかむなしき空に散る花の あだなる色に迷ひそめけん

『草庵集』巻第十・一三七〇

が、左阿弥作三番目物の「藤」に、

後シテ「如何なれば虚しき空に、散る花の、徒なる色に、迷ひ初めけん

と、ワキの待謡に続けて引かれている。

## 五

以下、その他の私家集（貫之集・頼政集・拾玉集・月清集）から謡曲への引歌とその個所を掲げ、若干の考察コメントを加えておこう。

紀「貫之集」（八六八？～九四五、正保版歌仙家集本系の所収歌八八九首）

○かき曇りあやめも知らぬ大空に ありとほしをば思ふべしやは

「蟻通」（世阿弥作四番目・略脇能物）

ワキ「これは仰せにて候へども、（中略）雨雲の立ち重なる夜半なれば、ありとほしとも、思ふべきかは

シテ「雨雲の立ち重なる夜半なれば、ありとほしとも、思ふべきかは、面白し面白し、我等叶はぬ耳にだに、面白

しと思ふこの歌を、などか納受なかるべき

と、上ノ句を「雨雲の立ち重なる」と替えて、紀貫之をシテとする玉津島参詣の挿話が綴られている。

源三位『頼政集』（二一〇四～八〇、四季・賀・別・旅・哀傷・恋・雑に部類、総歌数六八七首）



○花咲かば告げよといひし山守の 来る音なり馬に鞍置け

「鞍馬天狗」(作者不詳切能物)

地謡「(上歌) 花咲かば、告げんと云ひし山里の、く、使は来たり馬に鞍、鞍馬の山の雲珠桜、手折枝折をしるべに

て、奥も迷はじ咲き続く、木蔭に並み居ていざく花を眺めん (下略)

と、牛若(後の九郎判官源義経)が、鞍馬の天狗に兵法を伝授されることを主題とする曲に引かれて居り、詠歌との関わりはあまりないが、鞍馬の花見という序奏部との関係で引いたものであろう。

○住吉の松の木間より見渡せば 月落ちかゝる淡路島山

「弱法師」(観世十郎元雅作四番目物)

シテ「(ワカ) 住吉の、松の隙より、眺むれば

地謡「月落ちかゝる、淡路島山と

シテ「詠めしは月影の

地謡「詠めしは月影の、いまは入日や落ちかゝるらん、(下略)

「富士太鼓」(世阿弥作説四番目物)

シテ「(上歌) 寝られぬまゝに思ひ立つ、く、雲居や其方故郷は、あとなれや住吉の松の隙より眺むれば、月落ちか

ゝる山城もはや近づけば笠を脱ぎ、八幡に祈り掛帯の、結ぶ契りの夢ならで、現に逢ふや男山都に早く着きにけ

りく

下ノ句の「月落ちかゝる」のは、淡路も山城も同様であろうが、「弱法師」「富士太鼓」ともに、天王寺を舞台に、あるいは天王寺・住吉の楽人とするところから、やはり、引歌との関わりを見過すわけにはいかないであろう。

「梅枝」(世阿弥作説四番目物)

地謡「心も共に住吉の、松のひまより眺むれば

シテ「波もて結へる淡路渚

地謡「沖も静かに青海の

シテ「青海波の波返し

地謡「返すや袖の折を得て、軒端の梅に鶯の

シテ「来鳴くや花の越天楽

地謡「謡へや謡へ

シテ「梅が枝

地謡「梅が枝にこそ、鶯は巢をくへ、風吹かば如何にせん花に宿る鶯——楽（がく）——

と、つごう三曲に同じ歌が引かれているが、いうまでもなく「富士太鼓」と「梅枝」は姉妹曲の関係にある。

『拾玉集』（慈円一一五五—一二二五の家集、六家集の一、七卷本四六一三首、五卷本五九二七首）

○君が代は春に春ある時ながら 八千代こめたる玉椿かな

「三輪」（作者不詳四番目物）

地謡「五濁の塵に交はりし、暫し心は足引の大和の国に年久しき夫婦の者あり、八千代をこめし玉椿変らぬ色を頼みけるに（クセ）

と、三輪の神婚説話を語るに当然ともいえる下ノ句の引歌とされよう。

○袂しるや深山の秋のもの憂きに それかあらぬか風の夕暮

「雲林院」（世阿弥作説三、四番目物）

シテ「誰そやう花折るは、（中略）まことの風は吹かぬに、花を散らすは鶯の、羽風に落つるか松の響きか人か、それ

かあらぬか木の下風か、あら心もとなと散らしつる花や、(下略)

と、「それかあらぬか」を引歌とするか否かについては若干の疑問がないわけではないが、結句にみえる「風」と、七音ということからして引歌とみることができようか。

『秋篠月清集』(藤原良経一二六九～一二〇六の自撰家集、六家集の一、教家本一六一五首)

○蓬生の末葉の露の消え返り　なほこの世にと待たんものは

「葵上」(世阿弥改作四番目物)

シテ「わらはは蓬生の

地謡「もとあらざりし身となりて、葉末の露と消えもせば、それさへ殊に恨めしや、夢にだに返らぬものを我が契り、昔語になりぬれば、なほも思ひは真澄鏡その面影も恥かしや(下略)

とあり、「蓬生の…葉末の露と消え」とすれば、やはり引歌であり、「蓬生」といえば物語の巻名にもみえるこというまでもない。



以上、私撰・私家集歌と謡曲との関わりについて考察してみたが、なお定数歌あるいは歌学類からの引歌とおぼしきものも若干みうけられる。誌幅の都合もあり、他日を期したい。

#### ▽参考文献

1. 佐成謙太郎『謡曲大観』(明治書院)
2. 新編『国歌大観』(角川書店)
3. 観世流大成版(檜書店)
4. 『能—現行謡曲解題(全)』(錦正社)